

はじめに——転倒と日々

突然、若いカメムシが都会のコンクリートの上でひっくり返った。あたりがしんと静まり返る。さっきまでカメムシは少し動いては立ち止まっていたが、私は黙っていたし、彼の邪魔をしなかった。カメムシは、地図のない国、遠くの国からやって来たようだった。遠くの国がどこなのか私は知らない。

ひっくり返ったカメムシはそれでもまだ生きていた。出来事は生きているうちに起きている。私は日々の生活を振り返る。オスカー・ワイルドは自分の日記が最も刺激的な読み物だと言っていたが、ほとんどの人にとってそれが人生の結論というわけにはいかないだろう。私はワイルドのように刺激的な毎日を送っていないが、いつ死ぬことになろうと、私の神経症は嵩^{かさ}じるばかりであるし、それで済めばまだいいほうだ。ここに掲載した最初のエッセーは砂漠で渴死した日本人についてであるが、転倒するくらいなら我々の日常の出来事であ

る。湯死から転倒まで色々ある。だが目の前からこのざらついた私の日々は消えてくれそうにない。なぜなら「芸術（芸術？）は短く、人生は長い」と人は思い知るからだ。芸術的結末に連なる瞬間は持続の観念と無縁であるし、これら無償の特権の瞬間は全てから孤立している。だからこそ文学は冒険となるのである。

私はカーキ色の外套を持っていて、それを着ると、カメムシの真似ではないが、なぜか決まったように道でひっくり返ることがある。足が悪くて杖をついているからといえばそれまでだが、たふんとりとめのない考えごと、そして考えることのできない状態が転倒の兆しとなる。外套が長いからということにしているが、たいてい一点集中をともなつたいわば酩酊的思考のせいなのだろう。だが転倒するのであれば、ただで起き上がってはならない。少しは目覚めねばならない。ともあれ、人が見れば大怪我をするようなひっくり返り方である。芝居がかつているわけではないが、そういうときはほぼ怪我をしない。友人のひとりとは階段から落っこちて死んだが、今のところ私は落ちない。直角に移動できる虫みたいに、瞬時のこつみたいなものがある。絵師菊池容齋に倣って言えば、「法」もなく「流」もなしにひっくり返ればいいのだ。だがこれが「法」であるのかもしれない。その他のものに行動がともなえば、法はすでに説かれていたのではないか。とはいえこんなことはまだ初心者言い草ではない。

容易に人を寄せつけない冒険があり、思いがけない転倒がある。このエッセー集に収められた文章も日々の「転倒」に近いのではないかと思う。私は自分でも形容しがたい「転倒」の音楽をやっているミュージシャンであるが、その点でだけ私の文学と音楽は冒険に似ているかもしれない。

(二〇二五年二月)

(1) 死の直前、坂本龍一は「*Ars longa, vita brevis*。芸術は長く、人生は短い」というヒポクラテス由来の格言を引用していたが、私の反対命題は坂本氏に敬意を表してのことである。昔、私は彼の友人であった。坂本龍一についての私の文章は『ひとりっきりの戦争機械』(青土社)所収の「坂本龍一 ニューヨーク・ノー・ニューヨーク」を参照されたし。